死の大地で

アリゲーター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死の大地で

【Ｎコード】
Ｎ０３５６Ｖ

【作者名】
アリゲーター

【あらすじ】
広大な砂漠ティアディアラ。一人の魔法使いが死の大地を蘇らせるため、単身で乗り込んだ。そこで彼が出会ったのは、二十年前に滅んだはずのティアディアラの民だった。時に反目し、時に衝突しつつも二人は力を合わせて困難にぶつかり、死の大地の復活を目指す。

死の大地での出会い

ミルージュの魔法使いベルトランは、目の前にある朽ちかけの建物を見て乾いた笑みを浮かべた。

１０カニーム（30メートル）はありそうな巨大な岩をくりぬいて作った蟻塚のような家は、手入れされた様子もなくあちこちが崩れ落ちていた。かつて祈りをささげられていたのであろう異教の神々の像は破壊され、残骸となり果てていた。

「終の棲家にゃピッタリだな」

ベルトランは杖を肩に預けると自嘲した。

縦横に２００スタディオン（約40キロメートル）はある広大なティアディアラの砂漠のど真ん中で、彼は自分がこれから住むことになる家と今しがたご対面したところだった。

複雑な心境で建物を眺めていたベルトランだったが、ふと視線を感じて振り返った。

が、建物跡の瓦礫が残っているばかりで、視線の主とみられるものはない。そもそも、この場所に彼以外の生物がいるということはあり得なかった。

柄にもなく神経質になっているらしいと苦笑しつつ、彼は建物の中へと足を踏み入れた。

入ってみると、中はすっかり砂に浸食されていた。このまま放っておけばそのうち建物自体が砂に埋もれ、やがて存在していたということすら分からなくなるだろう。

最上階である１０階に上がってみると、窓から広大な砂漠が一望できた。地平線までずっと砂の海が続いている。
ベルトランはかつての住人が使っていたであろう椅子に腰かけると、強烈な日差しの降りかかる大地を眺めながら煙草に火をつけた。
「ティアディアラの砂漠に緑を戻せ、か。誰のせいで砂漠になったと思ってるんだ」
細く煙を吐き出すと、ベルトランは自嘲した。
地平線の向こうまで広がる不毛の大地を見て、ここがかつては緑あふれる豊かな大地だったと誰が分かるだろう。

かつてティアディアラは肥沃な大地だった。多くの人間が住み、農業も商業も盛んな地方だった。
しかし二十年前にミルージュを中心として異教徒との大規模な衝突があった時に、ティアディアラが異教徒の本拠地となったのが不幸の始まりだった。
当時、度重なる暴動と報復により、異教徒に対する憎悪が膨れ上がっていた。敬虔な信徒の神への祈りは異教徒への攻撃へととってかわり、互いが互いに理性を失うほど憎み合っていた。
神の御名の下に異教徒どもを焼き払え、とミルージュの国王が言った。
ミルージュの魔法使いたちはティアディアラを魔法で火の雨を降らせた。当時十代始めだった彼も張り切って参加したうちの一人だった。

緑豊かだったティアディアラは焼け野原となった。しかしそれでも異教徒たちは生き残り、愚直な程に抵抗した。そしてミルージュの民は異教徒を殲滅しろと声高に主張した。

そして次に国王は命じた。かの大地に沈黙の灰を撒け、と。

沈黙の灰と呼ばれる毒薬は大量生産が容易で、除去が困難だった。魔法使いたちによって風で運ばれたそれは大地を汚し、水を汚し、異教徒の命を奪い去った。

と同時に、肥沃なティアディアラを砂漠に変え、人が住むことも叶わぬ死の大地へと変えたのだった。

当初は快哉を上げていたミルージュの民も、時が経てば気がついた。ティアディアラが死の大地となってしまったことの弊害を。

死の大地では湧き出る水はおろか、風に舞う砂ですら吸いこめば体の毒となる。となればティアディアラに住むことはおろか、余所へ行くための交通の要所としても使えない。そもそも通るどころか近付くことさえできないのだ。

その上沈黙の灰の影響は徐々に広まり、ティアディアラを中心とした砂漠は広がりつつあった。

交通の要所が潰され、食料を生産する場所が減り、周辺へとその悪夢は広がっていく。

その時になって、ミルージュの人間はようやく自身の失策を知ったのだった。

そしてその責任を取らされたのは誰であろう、国王に命じられてティアディアラを滅ぼした魔法使い達だった。

一部の優秀な人間は国に引き留められたが、魔法使いの大半は選ばされた。死罪となるか、それとも死の大地を甦らせる仕事をするかを。

ベルトランは自ら望んでティアディアラへとやってきた。かつては実り豊かだった大地は、彼が想像していたよりもずっとひどい有様だった。

すっかり短くなった煙草を消すと、ベルトランは立ち上がった。数日分の食料はある。まずは住環境を整えなければならない。

砂漠を復活させるにあたり、魔法使い達にはいくつかのアイテム与えられた。

一つは沈黙の灰の毒素を中和するという草の種。

一つは水の少ないところでも育ち、死の大地でも育つという木の実。

一つは体内の毒素を排出する魔法薬。

一つはどこに居ても居場所が分かる魔法の首輪。

例にもれずベルトランもそれらを持っていた。が、それらが住環境を整えるのに役立つかと言えばもちろんそんなことはない。

全ては自分でしなければならない。

まずベルトランは持ってきた紗を窓と出入り口に取り付けた。魔

法陣の描かれたそれは、入ってくる毒素を中和する働きがあった。友人からの餞別その１である。
さらに部屋の中央にルトの壺を置いた。これは空気中の水分から水を集める便利な魔法アイテムだ。浄化された空気から集めた水ならば、飲んでも害にならない。

ルトの壺が動いているのを確認すると、ベルトランは荷物を置いて部屋を出た。手に持つのは相棒である杖だけだ。

建物の外に出たベルトランは、ふと足を止めた。
やはり視線を感じる。

「……誰だ？」

問いかけに返ってきたのはこぶし大の石だった。
顔面めがけて投げられたそれをベルトランは咄嗟に避けた。

「誰だ、出てこい！」

今度は語気を強めてベルトランは言う。
石が飛んできた方向からの返事はない。かつては建物の壁だったのであろう部分のどこかに隠れているのだろう。

ベルトランは杖を構えた。

「１０数える間に出てこなければ、攻撃する。１……２……３……４……」

壁の向こうで人が動く気配がした。が、出てくる様子はない。

「5、6、7、8」

せかすようにカウントを早くしてみる。と、

「ちょっと待ってよ！」

慌てたように立ち上がったのはは、十代半ばと思しき少女だった。褐色の肌に長い手足。黒目黒髪の彫りの深い顔立ち。それはティアディアラに住んでいた異教徒たちの特徴と一致していた。

思いもよらぬ人物に、ベルトランは呆然とした。

「何よ」

少女はベルトランを睨みつける。

彼は目の前にいる少女が幻覚ではないかと疑いつつ尋ねた。

「君は一体誰だ。ミルージュから派遣された同業者か？」

途端に少女が顔色を変えた。

「ふざけないで！　誰があんな悪魔の国なんかに！」

ベルトランは目をみはった。

「なら君は……こんな場所に住んでいるっていうのか？　冗談だろう？」

彼が視た限り、黒いアバヤを身にまとった少女は何一つ特別な装

備らしきものをしていなかった。砂漠の民に相応しい、しかし沈黙の灰で汚されたティアディアラには似つかわしくない格好だ。

「……こんな場所！？　こんな場所ですって！？　よくもそんなことが言えるわね！」

少女は目を吊り上げ、憤怒に声を震わせた。

「あんた、ミルージュの魔法使いでしょう！？　あんたたちがこの町をこんな風にしたんじゃない！」

悲痛な弾劾がベルトランの心をえぐった。

「火の雨を降らせて、沈黙の灰を振りまいた！　あんたたちの罪は未来永劫消えない！」

少女の目は火の雨を降らせた後のティアディアラの民の目よりも暗く、憎悪が燃えあがっていた。

少女を見ながらベルトランは眉根を寄せた。

「君は、誰だ」

二度目の質問である。

少女は自分の発言が流されたことでさらに怒りを募らせながらも、彼の質問に答えた。

「私はゴルネサー。ティアディアラの民よ」

告げられた言葉に、ベルトランは息を飲んだ。

彼女の言うことが本当ならば、それは彼にとって希望となりうる

ことだった。生き物が全て息絶えたと言われた死の大地で、彼女はティアディアラの民として生きていたのだという。

ならば、と彼は緊張で震えそうになる自分を叱咤しながら口を開く。

「――――君のご家族は今どこに？」

ゴルネサーは嫌悪をあらわにした。顔をゆがめると、憎々しげに彼を睨む。

「死んだわ。あなたたちが沈黙の灰を撒いた時に」

ベルトランは疑問を呈した。

「なら君はどうやって産まれた？　あの惨劇は二十年前の話だ。君はどう見たって、二十歳には見えな――」

「うるさい！」

ゴルネサーは怒鳴った。

一瞬だけ少女の姿に何人もの人間の姿が重なって見えた。しかしそれは本当に一瞬の出来事で、ベルトランが瞬きをした次の瞬間にはその幻は見えなくなっていた。

「今度は何をしに来たの？　今のティアディアラはサソリの一匹もいない死の土地よ。これ以上私達の街を踏みにじらないで」

威嚇するように睨みつけるゴルネサーに、ベルトランは怯まずに言い返す。

「俺はこの土地を生き返らせるためにやってきた」
「嘘！」
「嘘じゃない」

彼はゴルネサーの目を見つめながら言った。
今まで自分たちがティアディアラにしてきたことを考えれば、信じてもらえないのは当たり前のことだ。しかしだからといって、この使命を投げ出すわけにはいかない。

「俺はここで植物を育てて、元の緑豊かな土地に戻すためにやってきた」

ゴルネサーは驚愕で目を見開いた。しかし驚愕はすぐに不審へととってかわる。

「自分たちで滅ぼしておいて、自分たちで再生させるっていうの？身勝手にも程があるわ」
「分かってる。でも誰かがやらなきゃいけないことだ」

ベルトランは苦笑いを浮かべた。
彼女に対する疑問は尽きないが、ここまで警戒心をむき出しにされては何を質問しても本当のことなど教えてもらえないだろう。

「とにかく、俺は早く取りかかりたいんだ。信じてくれとは言わない。しかしさっき言ったことは嘘じゃない。神に誓って」

彼の持てる精一杯の誠意を表現しての言葉だったが、ゴルネサーは嫌そうな顔をした。

「沈黙の灰を撒き散らすような人間の信じる神に誓われたって信頼

できないわ」
「男に二言はない。言ったからにはやるさ。見ててくれ」
「信用できないわ」
しかし言葉とは裏腹に、彼女の表情は少しだけ穏やかになったようだった。

ゴルネサーが自分を攻撃してこないことを確認したベルトランは、先ほど目をつけておいた小屋へと足を向けた。
建物のすぐそばに立っていた小さな小屋の中には、彼の予想通り井戸があった。
彼は底を覗き込む。3カニーム（9メートル）程の深さのそれは枯れているようだった。

「無駄よ。ティアディアラの井戸はどれも枯れてしまった」
ゴルネサーが悲しそうに呟く。
しかし諦めきれなかったベルトランは井戸の縁を乗り越えた。
「エラヌクラク」
杖を振り呪文を唱えて飛び降りる。ゴルネサーが慌てて井戸の底を覗き込むが、ベルトランは3カニームもの落下に堪えた様子もなく着地していた。

「エラヌクラカ」

再び杖を振るって彼が呪文を唱えれば、杖の上部に取り付けられた宝玉が明るく光った。

明かりをかざしながらベルトランは井戸の底を検分する。
やはり先ほど上から見たとおり、井戸はすっかり枯れてしまっているようだった。丹念に調べてみてもスプーンのひと匙ほどの水さえ存在していなかった。

そのことを確認したベルトランは、杖で井戸の底に魔法陣を書き始めた。
魔力の込められた文字と記号は複雑であるが、彼にとっては慣れたことである。
書き上がった魔法陣に、ベルトランは杖を強く突き立てた。

「イオケテッド、聖霊よ。エサディサガス、我は水脈を求める」

魔法陣が光を帯びた。
常ならば、彼によって呼び出された聖霊が水脈のありかを彼に知らせてくれるはずだった。
が、魔法陣はそれっきり、うんともすんとも言わない。

「……な」

想定外の事象にベルトランは呆気に取られた。
未だかつて彼が聖霊の呼び出しに失敗したことはない。

彼は魔法陣に誤りがないことを確認すると、もう一度挑戦しようと杖をかざしたが、上から降ってきた声に動きを止めた。

「何度やっても無駄よ」
「なぜそう思うのか聞いてもいいか、お嬢さん」
ベルトランが見上げながら尋ねると、ゴルネサーは冷たく言った。
「この地に聖霊は近付かない。汚れているから」
「確かか？」
「信じられないなら死ぬまでそこで聖霊様に呼びかけていれば？」
それだけ言うと、ゴルネサーの顔が見えなくなった。
ベルトランは手で顔を覆った。
「参ったな……」
植物を育てるには大量の水が必要だ。まして、この広大な土地、ルトの壺から作る水程度では到底足りない。
聖霊の力を借りることができないのであれば彼に残された道は一つ。自身の魔力を使って探索魔法で水脈を発見するしかない。
ゴルネサーの言う通りならば、ティアディアラにある水脈は全て二十年前と違うところを流れているということだ。
「いや、もうひとつあるのか」
ベルトランは呟く。
ゴルネサーが生きているということは、彼女は今までこの地で生きられるだけの水と食料を得ていたということになる。
彼女が水を得ていた場所が分かればあるいは。

一縷の希望にかけ、彼は井戸の底から這い上がり始めた。

不安定な少女

もしかしたら姿を消しているかもしれないと危惧したが、幸いなことにゴルネサーは井戸のすぐそばにいた。

小屋の石壁にもたれかかっている彼女は、井戸から出てきたベルトランを無言で見詰めている。

「お嬢さん、君に聞きたいことがある」

彼の言葉にゴルネサーは体を固くした。警戒をあらわにし、口を固く結んでベルトランを睨んでいる。こんなところで躓いていては、何のためにここに来たのか分からない。彼は内心で肩をすくめると、地面にどっかりと腰をおろし、彼女に話しかけた。

「君はティアディアラの民だと言ったね」

ゴルネサーは返事をしなかった。ベルトランの意図を読み解こうとひたすら彼を観察している。

彼もそれを分かった上で問いかけた。

「君は今のティアディアラをどう思う？」

「は……？」

意表を突かれたらしく、ゴルネサーは訝しげに瞬いた。

「かつてティアディアラは緑豊かな土地だった。人々も大勢住んでいたし、動物もたくさんいた。そうだろう？」

ゴルネサーの体が震える。褐色の肌に朱が差した。彼女はベルトランに詰め寄った。

「ええ、あなたたちが悪魔のような所業をするまではね！」

「しかし今は違う」

「見て分からない！？」

ベルトランのもってまわった言い方に、ゴルネサーはイライラとした調子で怒鳴った。

「ああ、分かる」

飄々とした調子でベルトランは言う。それが気に入らないゴルネサーはますます頭に血を登らせた。

激情のままにベルトランの胸倉をつかんだゴルネサーだったが、彼女が再び怒鳴り出す前にベルトランが言葉を挟みこんだ。

「君はティアディアラがこのままでいいと思っているか？」

「思うわけないでしょう！」

「俺もそう思うよ。君はこの死の大地を変えたいと思う？」

「当たり前よ！」

「緑豊かな大地に？」

「決まってるでしょう！？」

「なら俺と協力しないか？」

「なんでミルージュの人間なんかと！」

「そうだ、俺はミルージュの人間だ。ミルージュの魔法使いだ。だから」

ベルトランは懇願するように言った。

「俺に償いをさせてほしい」

それは彼の嘘偽りない気持ちだった。

ゴルネサーは固まった。かと思うと、唐突に彼女の体から力が抜けた。それまで彼の胸倉を掴んでいた手がだらりと下がる。

「今更何ができるっていうの」

ゴルネサーの言葉はどこか自身に向けられたもののように感じられた。

「まだ分からない。しかしやる前に諦めたら何もできない。違うか？」

「ティアディアラは死んだのよ。私以外みんな。みんなよ！」

泣き叫ぶと、ゴルネサーは小屋を飛び出した。ベルトランは慌てて彼女を追う。

小屋から出た途端、肌を焼くような熱気が彼を包む。

ゴルネサーを探してみれば、彼女は壊れた像の前で佇んでいた。

元は美しい神々をかたどったものであろう石像は今や見る影もない。

二十年前の被害は大きい。

そしてそれと同じくらい痛恨だったのは、二十年もの間ティアディアラに救いの手を差し出さなかったことだろう。

普通の土地に人の手が入らなかったというだけならば問題ない。しかし二十年前に焼き払われ沈黙の灰が撒かれたこの地は、全ての動植物が滅んでしまった。そして地表に撒かれた毒素は徐々に土深

くまで潜り、大地を汚染していった。
生きているものが一つもない土地では、二十年の歳月はただただ残されたものを風化させ、状況を悪化させるものでしかなかったのだ。

「……この場所は、聖地だったの」

背を向けたままゴルネサーが語り出す。

生きるものがひとつとして存在しない空間で、ただ一人黒いアバヤに身を包んだ少女が立っている様子はどこか現実と乖離して見えた。後ろ姿が黒一色の彼女は、まるで彼女自身までもが命を持たない影であるようだ。

「あなたがさっきいた建物は巡礼者の宿だった。ティアディアラは多神教だけど、その中でも一番偉大なる神を祭っている神殿がここのすぐ南にあったから、毎日たくさんの人が来ていたわ。毎日にぎやかで、平和だった」

ゴルネサーの姿に、幾人もの姿が重なって見えた。今度は人間ではなく、異形の姿をした者たちだった。
しかしそれも刹那のことで、すぐにその幻は掻き消えた。
ベルトランは目を凝らし、なんとか彼女の正体を視ようとしたが、彼の目にはやはりゴルネサーは何の魔法アイテムも付けていない、単なる少女にしか視えなかった。

「二十年前にミルージュから攻撃を受け始めたとき、たくさんの人がこの場所に逃げ込んできた。神の御加護を祈って」

彼女はまるで、見てきたかのように語る。

「家族、恋人、友達、仲間、そういった人たちが手に手を取ってここに来た。でも、ミルージュの降らせた火の雨は命の源の森を枯らして、家を壊した」

アバヤの裾が揺れる。

「誰が神に祈っても駄目だった。それでもまだ生きてたから、希望はあった。でも、沈黙の灰が降ってきた」

沈痛な声に、ベルトランは罪悪感にさいなまれた。

若かりし頃の彼は、ティアディアラの異教徒たちが自分たちと同じ人間であるということを一向に考えつかなかった。火の雨を降らすのも、沈黙の灰をばらまくのも、全ては単なる敵の排除、害虫の駆除程度にしか考えていなかった。ゲーム感覚ですらあった。

しかし、歳を重ねるごとに自身のやったことの罪深さに気付かされ、苛まれるようになった。あの時に見た光景の意味を、今さらながらに知るようになったのだ。

そして今、生命の息吹が感じられない大地を目の当たりにして、過去の自分を殺してやりたくて仕方がなくなっている。

「草木は枯れて、鳥は地に落ちて、魚は水に浮かんだ。虫は姿を消して、人は死に、命の火は消えた」

低く潰れたような声で呟くと、ゴルネサーは振り返った。生気の消えた真っ黒な目がベルトランに向けられる。

「もしこの地から沈黙の灰の毒素を取り除ければ、貴様ら強欲なミルージュの人間はさぞや喜ぶのであろうなあ？　貴様らにとって邪魔な異教徒はおらぬ。害虫も害獣もおらぬ。町も畑も一から好きな

ように作れよう。貴様らの好きなようにこの地を作り変えることができるというわけだ」

ゴルネサーはくつくつと笑う。偏屈な老人を思わせるそれに、ベルトランとは体の芯が冷えるような感覚を覚えた。

彼の目の前には先ほどまでの感情的な少女はいなかった。

これは誰だ？

ベルトランは自問するが、答えは出ない。

「そういえば、ティアディアラは貿易の要所としても使い勝手が良い場所だったねえ。死人に口なしと言うし、ミルージュの外道どもに都合のいい事実やら歴史を内外に広めれば、我が物顔でこの地を占領できるというところかね。ヒヒヒ、ミルージュの連中の考えそうなことさ」

今度は不気味な老婆の声だ。

いささかの恐怖を覚えながらも、彼はしっかりとゴルネサーを視た。

しかしゴルネサーはゴルネサーだった。何かに魔法で体を支配されているというわけではないらしい。

「ほら、なんとか言ったらどうだい、若造。図星をつかれて言葉もでないのかい」

老婆のような声でゴルネサーがこちらを睨みつけてくる。鬼気迫るその形相に驚きつつ、ベルトランは釈明した。

「違う。俺は自分の罪を償いたくてここに来た。この死の大地を蘇

らせたい。占領だのなんだの物騒なことは考えてない」
「あんたがそうでも、ミルージュはどうだろうねえ？」
意地悪くゴルネサーが問いかける。
しかしベルトランは毅然として言い返した。
「そもそも俺たちがティアディアラに来ることになったのは、国がこの地の汚染から生じる弊害の責任転嫁のためだ。彼らは結果に期待してるわけじゃない。責任逃れをする材料にしただけだ」
それは決して褒められることではない。しかし、彼にとっては千載一遇のチャンスだった。
「沈黙の灰で汚染されたティアディアラを浄化するのは一朝一夕で出来ることじゃない。長い年月が必要だ。人が住めるようになるころまでミルージュという国が存在しているかも定かじゃない。だが、ティアディアラに緑が戻ることは悪いことじゃないだろう？　俺はこの地を汚した毒素を取り除いて、緑を取り戻す。それだけだ」
この不毛の大地を甦らせることができるなら、それは誰であっても構わないはずだ、と彼は語る。
「――なるほど、それがあなたの考えってわけね」
唐突にゴルネサーの声が元に戻った。表情も憑きものが落ちたようにすっきりしていて、目にも輝きが戻った。先ほどまでの様子が嘘のようだ。
いや、嘘のようというよりも、
「……もしかして、俺のこと担いだのか？」

自失から返ったベルトランが尋ねると、ゴルネサーは涼しげな顔で答えた。

「わたし、別人みたいだったでしょ？　お芝居は得意なの」

「……女優になれるよ」

ベルトランはがっくりと脱力した。

ゴルネサーの意図が読めない。てっきり感情的で直情的な性格だと思っていたのだがどうしてなかなか、したたかだ。

「ちょっとあんたの真意を確かめたくて揺さぶってみたんだけど、全然反応ないから焦っちゃった」

ぺろりと舌を出すゴルネサーは、少し大人っぽい感じはするもののいかにも少女らしい雰囲気だった。

「こんなところで立ち話もなんだし、建物の中に入らない？　ここ、暑くって」

「あ、ああ」

あまりの変わり身に呆気に取られながらも、ベルトランはゴルネサーを先導して自分が拠点と定めた部屋へと案内することにした。こちらの手をある程度明かさなければ、ゴルネサーに信用してもらえないと悟ったのだ。彼女はきっと、一筋縄ではいかない。

未だ疑問が多々あるものの、とりあえずはゴルネサーの軟化した態度に胸をなでおろすベルトランだった。

当座の目標

ベルトランが居室と定めたのは十階だった。
しかし毎回階段を往復するほど彼の元気は有り余っていない。そんな運動を毎日していれば運動から三日後に来る筋肉痛および関節痛に悩まされること間違いなしだ。
ゆえに彼は階段に短縮魔法を掛けていた。

「二階じゃないのね」

窓の外の景色を見たゴルネサーが目を丸くして呟く。

「ああ。高層の方が何かと良くてね」
「高みからティアディアラを見下そうっていうの？」
「穿ち過ぎだ」

嫌味っぽく言うゴルネサーに、ベルトランは苦笑した。

さて、ゴルネサーに椅子をすすめた彼は、彼女に向き合って座った。二人の間には水のたたえられたグラスが二つある。ルトの壺から湧いたものだ。時間が僅かなこともあり非常に微量だが、綺麗な水はこの乾燥した地域では何よりのもてなしとなる。

「色々聞きたいことがあるんだが」

そうベルトランが切り出すと、ゴルネサーはぴっと指を突き付けてきた。

「その前に、わたしはあんたから大事なことを聞いてないわ」

「なんだ？」
先ほどのことがあるので、彼は内心身構えながら返事をする。
彼の返答が不服だったのか、ゴルネサーは口をとがらせながら言った。
「あなたの名前よ。人には色々尋ねる癖に、名乗りもしないなんて失礼でしょう」
「名乗ってなかったか？」
「一度も」
ベルトランは頭をかいた。普段から礼儀には疎い彼だったが、さすがにばつが悪かった。
「そいつはすまなかった。俺はベルトラン。ベルトラン・ファルギエール。しがない魔法使いだ」
「ふうん。長ったらしい名前」
「そうか？」
自分から聞いた割にはさほど興味を示さないゴルネサーに、ベルトランは閉口した。
若い女の子というのは皆こんなもんなんだろうか？
歳の離れた女性とは触れあう機会のなかったベルトランである。どうすれば若い女性が喜ぶかなどということも知らなかった。若い女性と世間話をしたのは思い出すのも難しいくらい昔のことだ。彼の人生の大半は魔法の勉強と研究に費やされていた。
考えあぐねた時の癖で、彼は懐の煙草へと手を伸ばした。
「煙草いいか？」
「好きにすれば？」

「んじゃお言葉に甘えて」

さばさばした様子の少女からは、先ほどの怒鳴ったり泣き叫んだりしたような情緒不安定なところは見られない。ごくごく普通の少女に見える。

しかし、とベルトランは考えた。

先ほどの声音を変えての演技も、鋭い指摘も、年相応とは到底思えない。この姿だって偽りのものでないという保証はない。

紫煙をくゆらせると、彼は意を決して口を開く。

「不躾で悪いが、君がどうやって今まで生きていたか聞いても？」

その質問は予想していたのだろう、ゴルネサーは気負った様子もなく首を振った。

「答えられないわ」

「信用できない？」

「ええ」

あけすけな物言いに、ベルトランはかえって笑ってしまった。

「だろうな。じゃあ協力は？」

「程度によるわね」

そう言うと、ゴルネサーは挑むようにベルトランを見る。

「あなたがここでどこまでできるか、口だけの詐欺師か否か。まだ分からないもの」

「手厳しいね」

「なら、わたしに支配魔法でも掛ける？」
「しないよ」

ベルトランは肩をすくめた。
支配魔法というのは、相手を意のままに操る魔法だ。高位の魔法使いしか使えない高等魔法である。

「君の親御さんはさぞかししっかりした方だったんだろうね」

彼が言うと、ゴルネサーは半目で彼を見た。

「あんた、世間話をしに来たの？　さっきから回りくどいのよ」
「悪かった」

ベルトランは素直に謝罪した。本題に入るまでの時間が長いのはよく同僚からも指摘される彼の悪癖だ。
一つ咳払いをして威儀を正した彼は、改めて質問を切り出した。

「俺は植物の種を持ってきている。しかしこれを育てるための水が足りない。どこかで水が確保できないか聞きたかったんだ」

ふうん、とゴルネサーは呟いて両手で頬杖をついた。

「だったら協力できないわ。井戸はみんな枯れてるもの」
「君はどこで飲み水の確保を？」
「秘密。でもわたしもギリギリの量しかないわ」
「そうか……」

煙草をくゆらせながら考え込むベルトランを、ゴルネサーはじっと見ている。

「イオク」

ベルトランが呪文を唱えると、彼の持ってきた鞄が開き、中から分厚い本が出てきた。随分使い込まれた様子のそれは、ベルトランの手元へと収まる。本の表紙には「ティアディアラ再生に向けて」と書いてある。友人からの餞別その2だ。

彼は目的のページを探してページをめくる。

「これだ」

ベルトランは探し当てた項目を指でさした。ゴルネサーが身を乗り出して覗き込む。

「『ティアディアラでの水の得方』？」

「ああ。一番いいのは聖霊の力を借りて水脈を探すことだったんだが」

聖霊が呼べなかったのは完全に想定外だった。

基本的にミルージュにおいては水脈や鉱脈を探すのには聖霊の力を借りる。昔は職人が自力でそれらを見つけ出し、掘りあてていたそうだが、聖霊の力を借りた方が圧倒的に効率がいいためにそれらの手法は失われてしまった。

しかし、水を得る方法は一つではない。

二人は文字を目で追った。

――ティアディアラは元々砂漠だったわけではない。山脈から流れ出る川により水資源が豊富であった。

しかし沈黙の灰の汚染後、森が死んでしまったことで水を蓄える機能が失われた。ゆえに時折降る雨を地中で留めておくことができない。

また、ティアディアラの湧水は全て枯れたという報告があるが、これは大規模なミルージュの攻撃により地形に変化が生じたためというより、水脈をつかさどる聖霊が移動したためと推察される。というのも――

長々しい説明文にベルトランは頭痛をこらえつつ読み進める。彼は昔から魔法関連以外の長たらしい文章というのが大の苦手だった。

――万が一、聖霊召喚での水脈探索が出来なかった場合の水の入手方法を記す。

一つ、探索魔法を１００カニーム（３００メートル）ごとに行使し、水の気配がするところを掘る。

二つ、尖った屋根の小屋を作り、地中から蒸発した水分を集める。土中に埋めても良い。下図参照。

三つ、ルトの壺に拡散魔法を掛ける。展開式は下記参照。ただし継続的に多大な魔力が必要となるため、推奨はできない。

四つ、雨水を貯水する。以前のティアディアラでは一年で１０ログ（３０００ml）以上の水が降っていた。現在は不明。

また、これらの手段で得た水に毒素が含まれているか否かは未確認である。十分に注意すること。また――

必要な情報を読みとったベルトランは本から視線を上げた。
「今のティアディアラで雨はどれくらい降るんだ？」
「なんで私が教えてやんなきゃいけないの？　自分で調べれば？」
不機嫌そうに言われ、ベルトランは目を白黒させた。
彼が本を読んでいた時間はそう長くないはずだが、気がつけば先ほどまで普通の態度だったゴルネサーは不機嫌になっていた。
内心で困惑しながらも、彼女の変調にベルトランは気付かないふりをした。下手に刺激して事態の悪化を招きたくなかったのだ。
「現地の人間に聞いた方が手っ取り早いだろう？　作業の開始は早い方がいいからな。雨水をためるならそれ相応の準備が必要になるし、もし雨水が期待できないようなら違う方法にしなくちゃならん。協力してくれるんだろう？」
ベルトランの言葉をゴルネサーはふてくされたような顔で聞いていたが、やがて渋々といった調子で口を開いた。
「……この二十年、ティアディアラの気候は様変わりしたわ。以前ならば雨季と乾季があったけれど、今は年中乾期の状態。たまに降る雨はスコールみたいに、短時間だけ降って止んでしまう」
「たまにっていうのは、どのくらいの頻度で？」
ゴルネサーは首をひねった。
「私が知ってる限りではひと月に二、三回ってとこ。寝てる時に降ってるかもしれないけど、この状態じゃちょっと目を離したすきに

水はどこかへ消えてしまうから」
「量は？」
「測ったことないわ。でもそれほどたくさん降るわけじゃない」
ゴルネサーはぞんざいに言うと、自分の近くに漂ってきた煙草の煙を迷惑そうに手で払った。ベルトランは煙草の火を揉み消した。
「なら、あまり雨水をアテにするのはよくなさそうだ。となると、方法としては一つ目の方法に加えて補助的に二つ目の方法を使うのが適切か？」
ベルトランは地図を取り出しながらブツブツと呟く。
彼のいる場所に印のつけられた地図はティアディアラのものだ。しかしそのほとんどは空白である。二十年前に地形が大幅に変わってから誰一人としてティアディアラの地形を調べた人間がいないからだ。ミルージュの王の命令により、魔法での探査すら禁じられていた。
現在彼がいるのはティアディアラの中央にある、かつて異教徒たちに聖地と呼ばれた場所だ。
東に行けば大きな湖があったはずだが、来る最中に寄ってみたそこはすっかり干上がった窪地と化していた。
つまるところ、水脈の手掛かりは一切ないため、しらみつぶしに探していくしかないのだ。
そんな彼の様子をゴルネサーは胡乱げな目つきで見ていたが、口を出す様子はなかった。
「とにかく、ここに書いてある水蒸気集積装置とやらを作ってみよう」

ベルトランが言うが、ゴルネサーは無言だ。
また先ほどのかたくなな少女に戻ってしまったようだと彼は内心で肩を落とした。
女心ほど移り変わりやすいものはないから厄介だという同僚の言葉を、彼は身をもって実感していた。

崩れる魔法陣

友人のフェルディナントからの餞別である「ティアディアラ再生に向けて」という本は、フェルディナント自身が記した本だ。彼自身が秘密裏に文献を調べ、実験し、収集して考察した結果が書かれている。フェルディナントはベルトランがティアディアラへ向かう十年も前から国に知られないように研究をしていた変わり者だった。

非常に研究熱心で勉強家な友人だったが、彼だけではどうしようもないことがあった。彼自身はティアディアラへ行くことはおろか、近付くことすらできなかったのだ。

ミルージュが国単位でティアディアラに近付くことを禁止していたというのもあるのだが、何より問題だったのは沈黙の灰の毒素だった。

「お嬢さん、そんな端にいると落っこちるぞ」

ベルトランが声を掛ける。

「そんなドジ踏むわけないでしょう」

ツンとして言うゴルネサーだが、少しだけ絨毯から乗り出していた身を引っ込めた。

地上から10カニーム（30メートル）ほど上空で、二人は絨毯に乗って空を飛んでいた。

空飛ぶ絨毯はミルージュでも持っているものは片手の数ほどの貴重な魔法アイテムであり、彼の大事な相棒である。空飛ぶ絨毯は一

角獣のたてがみを糸とし、魔法使いの魔力を染料とする。糸の一本一本に呪文を刻むという気の遠くなるような根気強い作業を経たのち、飛行の魔法陣がしっかりと形作られるように織る。膨大な魔力と手間がかかるゆえに、愛着もひとしおだ。

さて、二人がなぜ絨毯に乗って空を飛んでいるのかというと、周辺の地理を把握するためであった。植物を育てるのならば地形の利用は不可欠だ。例の水蒸気集積装置を設置するにしても井戸を掘るにしても、ある程度めどをつけておきたいというのがベルトランの考えだった。

ちなみに一度はゴルネサーに適した場所はないかと尋ねてみたが、彼女の答えは沈黙だった。自分で調べろということらしい。ただ、ベルトランが空飛ぶ絨毯を広げて乗ったところで彼女も乗りこんできたので、まるっきり関知しないというわけでもないようだ。

「……それにしても」

風が出てきたのでベルトランは口元を覆う布を引き上げながら呟く。

「あまり長時間外に居たらぶっ倒れそうだな」

空飛ぶ絨毯で滞空しているとはいえ、砂つぶてに交じった毒素が遠慮なく彼の体を蝕もうとしていた。彼の持つ魔法アイテムであるペンダントがある程度中和してはいるが、完全にとはいかない。

「ならとっとと尻尾を巻いて逃げ帰れば？」

ゴルネサーが冷淡に言い放つ。彼女もベルトランと同じ条件、いや、魔法アイテムがない分過酷な条件下のはずだが、少しもこらえ

た様子がなかった。その理由にいくつか彼も仮説を立てていたが、どれも決め手に欠けていた。

「何もしてないのに逃げるわけにはいかないんでな。――あの辺が良さそうだ。とりあえずやってみるか」

そう言うと、ベルトランは絨毯を下降させた。地表間近まで絨毯を近付けると立ち上がり、飛び降りる。ゴルネサーも無言でそれに続いた。

基本的に魔法というのは魔法陣を描き、呪文を詠唱することで発動する。ただし簡単な魔法ならば魔法陣を描かずとも呪文だけで発動できるし、逆に魔法陣だけでも魔法の効果を発動させることはできる。その代わり精度が落ちたり、魔力の消費量が増えたりするのだが。これは魔法陣や呪文を簡略化した場合にも同じことが言える。

さて、ベルトランは杖で地面に魔法陣を描き始めたのだが、それから間もなく彼は頭を抱える羽目になった。

「……いい年して砂遊び？」

呆れ気味なゴルネサーの声が耳に痛い。

完全な砂地となっている地表に大規模な魔法陣を描くとどうなるか。

まずベルトラン自身の足跡が魔法陣の中に刻まれてしまう。

次に、ベルトランがうっかり魔法陣の一部を踏んでしまうと、それが歪んで消えてしまう。

そして、風が吹くと魔法陣が砂に埋もれて消えてしまう。

魔法陣自体が大きいために、描いた端から駄目になっていく。いたちごっこだった。

「おかしい。なぜ消えるんだ。なぜ残らない……」

ベルトランはブツブツとつぶやく。

「風が吹いてる砂砂漠(すなさばく)で文字を描いたら消えるに決まってるでしょう？　馬鹿じゃないの」

ゴルネサーが眉をしかめる。

しかし彼はかぶりを振った。

「違う。魔法陣ってのは魔力のラインを残すから意味がある。その媒体に意味はない。描こうと思えば砂の上だろうが水の上だろうが描くことはできる」

「でも崩れてる」

「だからおかしいんだ。魔法陣が形成できない」

魔法陣がしっかり形成できないということは、ラインを描くときに込めた魔力が描いた端からどこかに散っているということだ。

「井戸の底で使ってたのは魔法陣じゃないの？」

ゴルネサーが不思議そうに言う。

「いや、あれも魔法陣だ」

しかし井戸の底で魔法陣を描いた時は普通に発動することができた。聖霊を呼ぶことはできなかったが。

暑さと毒素でぼんやりとしそうになる頭をベルトランは必死で働かせた。
あの時と今では何が違うのか。魔法陣自体か？　それとも場所？
それとも時間？
唸りながら考え込むベルトランとは対照的に、ゴルネサーは諦観のにじむ声で言う。
「最初から無理だったのよ。ティアディアラは沈黙の灰で汚されてしまった。大地の持つ生気も魔力も、みんな枯れてしまった」
心が痛んだベルトランだったが、彼女の言葉に引っかかるものがあった。
「生気も魔力も……？」
と、ベルトランの頭にひらめくものがあった。
沈黙の灰の毒素が大地にどのように働くかという研究レポートは、あまり出回っていない。そのあまりのむごさに民衆からの支持を失うことを恐れたミルージュの上層部が握りつぶしているからだ。ゆえに沈黙の灰の脅威に晒されている地域以外では――いや、晒されている地域の民ですら――沈黙の灰の毒素がどのように人体に働くかということを知らされていない。まして、大地にどのような影響があるのかなど。
ベルトランは過去に一度、その研究レポートを見ることができた。その時の記憶を必死に掘り返す。
そして彼は思い出した。
「――沈黙の灰のせいだ」

「だから私はさっきからそう言ってるでしょう」
ゴルネサーが苛立たしげに言うが、興奮したベルトランの耳には届かない。
彼は大急ぎで地面に簡略した魔法陣を描いた。
「オイェサコージュ！」
大量の魔力を込められた魔法陣は日差しの下でもなお明るく発光し、辺りを包みこんだ。
「な、何よ。何の魔法？」
見た目には全く変化のない様子に、ゴルネサーは首を傾げた。
ベルトランは先ほど失敗した魔法陣を再び地面に描きながら答える。
「浄化の魔法だ。沈黙の灰の効果を抑えることができる」
「そんなのがあるなら最初から使いなさいよ！」
ゴルネサーが怒鳴る。
「いや、効果を抑えると言っても一時的なものだ。時間が経てば再び毒素が蔓延する」
「じゃあなんでそんな魔法使ったのよ」
「悪い、後で説明する！」
そう言うと、ベルトランは大急ぎで残りの魔法陣を描き上げた。
今度は魔力のラインが崩れることなく魔法陣が完成した。

「エサディム、尖った屋根、受ける器、伝う管、集める瓶、イニローディジェーミ！」

ベルトランが杖を突き立てて呪文を唱えると、地面が盛り上がった。

現れたのは高さ３カニーム（９メートル）、直径１０カニーム（３０メートル）ほどの四角錐の形の屋根だった。その縁沿いに樋があり、樋の先には半分ほど地中に埋まった水瓶がある。

さらにベルトランは四角錐の屋根に魔法陣を刻む。

「オリスカイキエル！」

呪文を唱えると、四角錐の屋根は冷気を帯びる。

フィルディナントによると、上手くいけば地面から上がってきた水蒸気が結露し、屋根の内側を伝って樋に流れ落ち、水瓶にたまるそうだ。

「こんなもんか……？」

ベルトランは出来上がった装置を叩いて呟く。この手の装置を作ったのが始めてなら、ティアディアラにこの手の装置が出来たのも初めてだろう。不安要素が一杯だ。

意見を求めようとゴルネサーに視線を向けたベルトランだったが、ゴルネサーが口をあんぐりと開けて固まっていたので礼儀正しく見なかったことにした。

同じように大地を浄化してから装置を作るということを繰り返し、徐々に慣れてきたのもあり、それから一時間経った頃には屋根の形

が微妙に異なる十個の水蒸気集積装置が出来上がっていた。
すっかり砂まみれになった体を払いながら彼は絨毯の上に戻った。
「少し魔力を使い過ぎた。一旦家に戻るぞ」
そう声を掛けたベルトランだったが、困ったように頭をかいた。
「あー、大丈夫か、お嬢さん。絨毯から落ちやしないだろうな」
ベルトランが再び声を掛けると、それまで呆然自失状態だったゴルネサーが我に返った。
「あああんたっ、おかしいんじゃないの！？　あんな超がつくほど難易度の高い魔法を……！　しかも十回連続！？　馬鹿じゃないの！？」
言葉が上手く出ないのか、赤い顔で手をぶんぶんと振り回しながらゴルネサーが怒鳴る。
ベルトランは苦笑しながら煙草を咥えた。
「魔法馬鹿、研究馬鹿とよく言われたよ。しかし上位魔法を使って馬鹿と言われたのは初めてだ」
恐がられたことはいくらでもあったがな、と彼は聞こえないほどの小さい声で呟く。
「とりあえず、話は部屋に戻ってからにしてくれ」
未だ興奮して支離滅裂なことを叫ぶゴルネサーをなだめつつ、彼

は絨毯を自身の拠点に向かって進めた。

沈黙の灰

部屋にたどり着いたころにはゴルネサーも随分落ち着いていた。ベルトランも清浄な空気にほっと息をつく。

「さて、まずは魔法陣が形成出来なかった理由から話そうか」

色々と問いただしたそうなゴルネサーを制するように、ベルトランは煙草に火をつけながら言う。

「魔法陣は魔力を込めた線を意味ある形にすることで初めて魔法陣となる。これは分かるな？」

「馬鹿にしないで」

ゴルネサーは口をとがらせた。

反抗期の娘がいたらこんな感じなんだろうか、とベルトランは少しだけ笑った。馴染みの同僚の顔の愚痴が思い出された。

「さっき魔法陣が崩れた理由は、簡単に言えばラインに込めた魔力がなくなってしまっていたからだ。イオク」

彼は自分の覚書のノートを取りよせながら説明を続けた。煙草の煙が彼の思考をクリアにする。

「これは俺も他人の研究レポートを読んで知ったんだが、沈黙の灰のばらまく毒素には二種類あるらしい。物理的な毒素と、魔法的な毒素だ」

ノートの一ページを破り取ると、図を描きながら説明した。

沈黙の灰の毒素の除去が困難であると言われるには理由がある。
まず沈黙の灰に含まれる物理的な毒素だが、こちらは毒性が弱い。ただし体内に蓄積し、摂取した毒素が一定量を越えると死に至る可能性があるということで、汚染された場所に居続けるならば定期的に排出しなければならない。症状は意識の混濁、末端の痺れ、めまい、吐き気などが主だと言われている。これが強まると死に至るというわけだ。こちらの毒素は年月を経るとこの効力が弱まるのでさほど問題ではない。また、これ一種類だけならば魔法を使えば土地を汚染している毒素を一か所に集めることが可能で、さらには中和の魔法を使って即座に無害なものに変えることも可能だ。
しかしそれを許さないのがもう一つの魔法的な毒素だ。
こちらはコアと呼ばれるものが存在し、それが沈黙の灰を最悪の毒素へと変える。
このコアは生命力や魔力を取り込み、毒素へと変える効果があるのだ。この生み出された毒素がある程度の時間を経て変質し、先述の物理的な毒素となる。
だからうっかりこのコアを体内に取り込んでしまった場合、内部から生命力、魔力を奪われてしまい、コアは体内で大量の毒素を吐き散らす。生命がそのまま毒素の塊へと変えられてしまうのだ。しかも物理的な毒素はコアに近ければ近いほど効果を発揮するため、ひとたびコアを体内に取り込んでしまえばあっという間に毒素に侵されてしまうのだ。
しかもこのコアは一時的に活動を抑えることができても、魔法を使って除去や中和をすることができない。魔法で破壊することができないのだ。現在唯一このコアをどうにか出来るのはマジカルプラントと呼ばれる植物だけだ。このマジカルプラントと呼ばれる植物は沈黙の灰のコアを分解吸収し、自らの養分へと変えてしまうらしい。

「――とまあ、これが俺の記憶と推論から導き出された答えだ」
「さっぱり分かんない」

ゴルネサーが顔をしかめて言う。ベルトランは首を傾げた。

「どの辺がだ？」

心底分かっていなさそうな彼の様子に、ゴルネサーの額に青筋が浮かんだ。

「なんで沈黙の灰の毒素が二つあったら魔法陣が形成できないのかの説明がないじゃないの！」
「ああ、それか」

ベルトランは今の説明で十分だと思ったのだが、彼女にとっては不十分だったらしい。彼は説明を加えた。

「沈黙の灰のコアは、魔力を取りこんで毒素に変える働きがある。つまり、魔法陣を形成するために魔力を込めたラインから魔力を吸収して毒素に変えていたってことだ」

それほど急速に魔力を取り込むわけではないので、短時間で描いた井戸の底の魔法陣は発動することができた。また、魔法自体が簡単なものだったというのもある。
逆に先ほどの魔法陣は形成までに時間がかかったので魔力を毒素に変えられてしまった。その上彼が使ったのはかなり高位の魔法。少しの魔力の損失でも形成を失敗する要因となった。

「だから一時的に毒素の働きを抑えるために浄化魔法を使った。で、魔力を取られないうちに魔法陣を描いて発動させたってわけだ。予想が当たってホッとしたよ」

ベルトランは笑う。ゴルネサーは納得のいかない顔だ。

「毒素がどうだこうだとか、そんな大事なこと分かってるんならなんであんたたちはもっと早くにティアディアラに来なかったの？」

噛みつくように言うゴルネサーに、彼は肩をすくめてみせた。

「残念ながら、俺がそのレポートを読んだのは何年も前の話だが、今の今までこのことをしっかり検証した人間はいない。俺がやったのも一か八かの賭けだったしな。ティアディアラの周囲にはミルージュの魔法使いが張った結界があるせいでこの二十年立ち入ることはできなかったし、沈黙の灰を研究する人間もいなかった」

「でも研究レポートで読んだって」

「その研究者は処刑されてすでにこの世にいない。そいつの研究室もレポートも、とっくの昔に処分された。だからこの研究を引き継いでる奴もいない」

ゴルネサーが顔をこわばらせた。

どう伝えようか考えたベルトランだったが、結局どんな風に言ったところで事実は事実だ。彼はありのままに話すことにした。

「沈黙の灰は最悪の兵器だ。どんな目的であれ、使うべきじゃなかった」

「じゃあなんで使ったのよ！」

ゴルネサーが叫ぶ。向けられた殺気に、ベルトランは目を伏せた。
「知らなかったからだ。いや、目先のことにとらわれ過ぎていたせいか」
自嘲するように彼は言う。彼は吸っていた煙草を揉み消すと、新しいものに火をつけた。
「沈黙の灰ってのは、二十年と少し前、異教徒との悪感情が高まった時に開発されたものだ。開発者は沈黙の灰の作り方と効用を記したレポートを残して失踪している。そもそも毒を作ったからといってそいつが解毒剤を作れたかどうかも謎だが」
当時ベルトランはやっとこさ王宮魔法使いになって修行に励んでいたころである。
「製法が簡易で、大量生産も容易。試作品として残されたもので実験して効果を確かめた。軍部は大喜びしたそうだよ」
ベルトランは顔をゆがめた。
その当時すでにミルージュの上層部はティアディアラを拠点に活動する異教徒たちに頭を痛めていた。ティアディアラを焼け野原にする計画はすでに確定していたが、それでも異教徒たちが抵抗することは目に見えていた。また、周辺諸国に対しての見せしめも必要だった。
そんな彼らにとって沈黙の灰という兵器はまさに渡りに船だったのだ。
「効果を確かめたならどんなものか分かっていたんじゃないの？」
「ああ、分かっていた。だが、違っていた」

当時の熱に浮かされたようなミルージュの様子を思い出した彼はため息をついた。自分もその浮かれポンチの中の一人だったことを思うと、さらに頭が痛い。
視野が狭くなった人間は慎重さが失われ、迂闊になるものだ。
「開発者が残した沈黙の灰はレポート通り、一カ月ほどでコアの効果が失われた。人間は水を二週間飲めなければ死ぬからな。それだけあれば異教徒の殲滅は出来ると上層部は踏んでいた」
極悪非道としか言いようがない。沈黙の灰での殲滅に踏み切ったミルージュの上層部も、それに従った軍部も、それに諸手を上げて賛成した民も。
人を愛せ、敵を許せという神の教えは報復合戦の前にはもろくもはかなく崩れ去っていた。
「でも、毒素は消えなかった……？」
一瞬だけ窓の外を見たゴルネサーは眉をひそめながらベルトランへと視線を戻す。彼はうなずいた。
「ああ。残された通りの製作方法だったんだが、試作の時とは作る人間が違うからか、それとも何か書かれていない別の要素があったのか、そもそも実験の方法が間違っていたのか……ともかく、コアの働きは失われなかった。効力が失われるまでの時間が違うのかもしれないと楽観視した阿呆どもが何も手を打たなかったせいで、この二十年は沈黙の灰に対して効果的な対処法も何も見出すことができなかった。何もしなかったんだから当然だな。ミルージュの連中にとっちゃ、隠しておきたい都合の悪い事実ってわけさ」

ミルージュの侵攻は周辺諸国からのバッシングを受けるに十分だった。その上さらに自国民からの支持を失うわけにはいかなかったのだ。

「……真実は時の娘よ。隠したところでいつかは露見する」

ゴルネサーの言うことは正論だ。

しかしその正論をミルージュの上層部が受け入れるには長い年月がかかった。

「そう。いつかはね。しかし諦めの悪い連中が悪あがきをしたからこの二十年はだましだましやってこれた」

「それが研究者の処刑ってわけ？」

「ご明察」

ミルージュはティアディアラの惨事に関わることを全て闇に葬った。

もちろん、沈黙の灰の影響があるからティアディアラは封鎖していたが、それはあくまで死んだ異教徒たちの呪いの影響が残っているから、ということになっていた。ティアディアラ全体を覆う大規模な結界もその呪いが広まるのを防ぐためだと。コアの効果もいずれは消え、そうなれば過去の大罪の証拠は隠滅できる、という実に馬鹿馬鹿しい考えのもとに。

「沈黙の灰の研究は禁忌となっていた。バレたら一族郎党処刑も辞さない厳しさでな。ところがどっこい、この二十年秘していた事実が明るみに出て、今や沈黙の灰除去の研究は国を挙げての一大事業だ。表向きはな」

ベルトランは吐き捨てるように言う。

「表向き？」

ゴルネサーが訝しげに言う。ベルトランは煙草をぎしりと噛んだ。

「ミルージュは国家予算のかなりの割合を沈黙の灰除去の研究に割いている、という事実無根の真っ赤なウソがまかり通ってるのさ」

「じゃあ、口だけってわけ？」

侮蔑を露わに少女が言えば、彼も忌々しげにうなずいた。

「今ミルージュが発表してる沈黙の灰についての研究成果ってのは、この二十年の間に処刑された研究者たちの運よく破棄されていなかった一部の研究成果だってんだから笑わせる。マジカルプラントも、沈黙の灰の毒素に耐えうる木も、毒素を排出する薬だってそうだ。国家を上げての研究だのなんだの言ってるが、今の研究者たちに与えられてるのは王宮の物置を改造した狭っ苦しい部屋だけだしな」

今の研究者たちも気の毒だが、それ以上に死んでいった研究者たちのことを思うとやり切れない。

件の沈黙の灰の毒素レポートは処分されたもののひとつだ。レポートが真実かどうか実証する前に研究者の一族郎党もろとも死刑に処され、残ったものは焼き払われた。今の研究者たちがそこまでたどり着くのはいつのことか。

「っと、お嬢さんにはどうでもいい話だったな。ともかく、沈黙の灰に関しての研究は、最近ようやく表立って始まったばっかりってことだ。進み具合は亀の歩みで望み薄。今はここで試行錯誤していくしかないってことだ」

ベルトランの言葉に、ゴルネサーは先が思いやられるとでも言うようにため息をつくのだった。
そしてふと思いついたように口を開く。
「そういえば、あんたって何者なの？」
「ん？　俺はしがない魔法使い……」
「とぼけないで」
ゴルネサーは彼の言葉を遮って睨みつけた。
「浄化魔法とあんな高度な物質創造の魔法を立て続けに使えるなんて、あんた、そんじゃそこらの魔法使いじゃないでしょう？」
ベルトランは眉を落とすと、咥えた煙草に手をやった。
「俺は単なる魔法使いだ。実力はあると自負してるがな」
「嘘よ。あんたぐらいの実力があるなら、どの国だって手放すわけがない」
「お褒め頂き恐悦至極だな」
「ふざけないで」
「ちょっとした冗談だ」
ベルトランはおどけて見せるが、ゴルネサーの表情が厳しくなるだけだった。
やれやれと彼は肩をすくめた。
「これでも一応国のお抱え魔法使いだった」
「でしょうね」
冷淡にゴルネサーが同意する。警戒心が再び見え隠れしていた。

「そもそも俺が……というか、俺たちがティアディアラに入れたのは理由があってな」

ベルトランは自国の醜聞をかいつまんで説明することにした。

切られたトカゲの尻尾

ティアディアラ封鎖の理由を偽っていたミルージュだが、そう何年もの間嘘を通せるものではない。

真実を白日のもとにさらしたのは、誰であろう商人たちだった。

以前は交通の要所としても使われていたティアディアラを封鎖されては商売に支障をきたす。異教徒を皆殺しにしたのだから呪いもあろうと理解と待ちの姿勢を見せたのは最初の数年だけ。いつまで経っても呪いの解除をしないミルージュに商人たちは業を煮やした。そもそも商人たちにとって宗教の違いなどたいした問題ではない。彼らにとって相手が客となるかどうか、自分に利益をもたらすかどうかが問題だ。

嘆願書を出そうとも、商人たちで圧力を掛けようとも、ティアディアラの封鎖は解除されない。何か理由があるのかと商人たちが各地で情報を集めた結果、異教徒の呪いであるはずの砂漠化がティアディアラの結界の外にまで広まっていることが分かった。

結界の外に広まるそれは本当に呪いなのか？　どうしてミルージュは対処しないのか？　――そもそも本当に呪いなど存在するのか？

根気強い調査は権力者からの圧力をくぐりぬけ、真実へと到達するにいたった。

すなわち、ティアディアラが封鎖されているのは沈黙の灰の毒素が原因である、と。

沈黙の灰がもたらした破滅を知れば、周辺諸国はもとより国民からの非難も湧き出てきた。

すでにティアディアラの民が滅んでいるとはいえ、誰かが責任を取る必要があった。

事件が起こったのは二十年前だ。当時の国王は健在だった。しか

し健在だったゆえに彼は責任をかぶるのをよしとしなかった。罪が罪だけに、償うのであれば死かそれ以上に辛い目に遭わねばならないからだ。
だから国王を筆頭に、まだ生きていた国の上層部は自身より下の人間に責任を押し付けた。
それが件の事件の実行犯である魔法使いたちだった。当時作戦に参加した魔法使いは年齢的には引退もほど近いものが大半だった。トカゲのしっぽ切りには最適だったというわけだ。

「ティアディアラの侵攻は大規模な作戦だった。参加したのはほとんどがベテランの魔法使いたちで、俺みたいな例外を除けばほとんどが当時四十代。歳がいってりゃ五十代もいた。今は若い世代も十分育ってきていたから、ミルージュとしちゃ邪魔なこうるさい老人どもが居なくなって万々歳。一石二鳥ってわけだ」

ベルトランは窓の外に向かって細く紫煙を吐きだした。
ゴルネサーは眉をしかめると、嫌悪感を露わに言う。

「ティアディアラはいつからゴミ捨て場になったのかしら」
「ゴミ捨て場じゃないさ。……だが、今後は実質魔法使いの流刑地になるかもしれない」

ベルトランは申し訳なさそうに肩を落とした。

「即座に首をはねられるのと、ティアディアラの復活のために働く、どちらがいいかと聞かれたら大抵は後者を選ぶ。体力こそないが魔法使いほどサバイバルに向いてる奴もいないしな」

それこそ腕の立つ魔法使いであれば、いかな極地であろうとも杖さえあれば生活を営むことは可能である。魔力を吸い取られるティアディアラは例外であるが。

ミルージュとしても、ティアディアラのために手を打っていると対外的にアピールできるし、十中八九生きて帰って来ないと分かっているのだから安心して追放できるというわけだ。

「俺たち魔法使いに言い渡されたのは、二十年前の罪を償うためにティアディアラの毒素と取り除いて緑を取り戻してこいということだった。俺は予め準備をしてからここに来れたが、大半の魔法使いは沈黙の灰の研究費に充てるって名目で財産を取り上げられた上に最低限必要な道具だけ渡されてティアディアラのどこかに派遣されている。水も食料も自給自足を言い渡されているが……何日もつことやら」

いくら魔法使いとしての実力はあろうとも、すでに引退間近の老齢の者がほとんどだ。毒素に満ちた砂漠にほとんど着の身着のままで放り出されて幾人生き残れるか。時間が経てば経つほど生存者は減っていくだろうとベルトランは予測していた。

そもそもここに派遣された魔法使いたちは沈黙の灰の毒素の効果を知らない人間もいる。二十年前に異教徒が血を吐いてのたうち回っていた姿だって、見た人間は限られている。

ティアディアラの殲滅が終わった後は、口にするのも禁忌とされていたようなありさまだ。正確な情報が行きわたっているとは考えづらい。

派遣――というよりは追放だが――前のミルージュ側からの説明と言えば、与えられたアイテムと彼らの行動の制限についてのみ。井戸端会議に参加している女房連中のほうがティアディアラの惨状についてはよっぽど詳しいだろう。そして魔法使いというのは得てしてそういう噂話とは隔絶された場所にいる。

「……っていうか、あんたは二十年前のあれに参加してたわけ？あんた歳いくつよ」
「当時で十三だった。今は三十三。君は？」
「女性に歳を聞くのは失礼よ」

さりげなくなされた質問はあっさりと流された。ベルトランは肩をすくめた。

「ま、昔は神童なんて言われてたよ。魔法使いとしての才能開花が早かったんだ。二十歳過ぎればただの人。しごかれて鍛えた技術だけは残ったがな」
「ただの人ならあんな高位の魔法を使いこなしたりしないわ」
「照れるな」
「皮肉よ」

もしかしてこれが彼女なりの愛情表現なんだろうかと考えたベルトランだったが、一瞬後には単に好かれていないだけだと結論付けた。

ゴルネサーは心底馬鹿にしきったように言う。

「じゃあミルージュの連中は、自分の大事な手札まで死地に送り出すような馬鹿揃いってことかしら」
「あー、いや、そういうわけじゃないんだが……」

ベルトランは歯切れ悪く言う。そんな彼をゴルネサーが訝しげに見る。

しばらくいいあぐねていた彼だったが、やがて彼女の視線に負けて白状することにした。別段隠しだてすることでもない。

「俺が希望したんだ」
「は？」
ベルトランは決まり悪そうに煙草をふかす。
「俺は行かなくていいと言われてたんだが、俺が行きたかったから希望してここに来た」
彼は当初ここに派遣される予定ではなかったからこそ財産を取り上げられる前に準備を整えることができた。入念な下調べも、友人からの餞別を受け取ることもできた。
「……馬鹿じゃないの。なんでわざわざ」
沈黙の後にゴルネサーが呟く。
ベルトランは僅かに苦笑した。
「贖罪したかった。それだけだ」
かつて泣いて詫びながら火の雨を降らせた人が問答無用で死の大地へと送り出され、かつて半ば遊びのように火の雨を降らせたベルトランが、安全な王宮で仕事を続ける。それが彼には許せなかった。たくさんの人から引き留められた。友人からは研究馬鹿はいつまで経っても子供なんだなと呆れられた。まるで潔癖な思春期の青少年のようだと。
しかし何を言われても決心は揺るがなかった。自身の罪は自分で償う。死の大地に再び命を。それが彼の望みだった。
「他の人たちと協力はできないの？」

ゴルネサーが言う。そこに含まれる感情に僅かな変化を感じ取り、ベルトランは少しだけ救われた気持ちになった。

「残念ながら、俺は単身で来ることを条件にここに入れてもらった」

そう言って、ベルトランは自分の首に巻かれた首輪を指差した。魔糸と呼ばれる糸で編まれたそれは、強力な呪石がところどころに組みこまれ、決して外れないようになっている。

「この首輪をつけている限り、俺は他の魔法使いと接触できない。基本的に魔法使いは二人組で派遣される。人数が増えると謀反を起こす危険があるから、一定数以上の人数が集まると首輪が共鳴して装備してる人間にダメージを与える仕組みだ。俺の場合は俺以外の魔法使いと接触すると首輪に強烈なオシオキをされるって寸法だ」

「……なんて悪趣味な」

ゴルネサーが絶句する。ベルトランはうなずいて同意した。

「だが、決まりは決まりだ」

彼は立ち上がった。

「さて、休憩も十分取ったことだし、井戸掘りに行くとするか。一相棒（絨毯）にも防護魔法かけないとな」

そんな彼にゴルネサーは何か言いたげにしていたが、結局何も尋ねないまま彼に続いて立ち上がったのだった。

水を求めて

再び魔法の絨毯に乗った二人は、拠点のすぐ近くを飛んでいた。
その頭上には五十本ほどの杭が浮いていた。
頭上のそれをゴルネサーは嫌そうに見た。

「いつ降ってくるかと思うとたまったもんじゃないわ」
「こっちに当てるような馬鹿はしないさ」

ベルトランが軽い口調で答える。
絨毯で外に出たベルトランは、まず拠点の近くで浄化魔法を使い、そこで土でできた3カニーム（9メートル）ほどの大きな杭を四十八本作ったのだ。大の男の胴体ぐらいはありそうな太さのそれは、先が鋭利に尖っている。

「……で、どうするつもり？　まさか杭で井戸を掘ろうってんじゃないでしょうね」

ゴルネサーが言うと、彼はにやりと笑った。

「こいつは目印だ」

ベルトランは杖を掲げた。朗々とした声で彼は呪文を唱える。

「杭よ、エモキテューキセガー！　イニローディジェーミ！」

彼が杖を振りおろすと、四十八本の杭は砂の海に向かって降り注ぐ。

等間隔に地面に突き刺さったそれは、上空から見ると彼の拠点を中心として整然と並んでいるのがよく分かった。

「ん、大体１００カニーム（３００メートル）間隔になってるな」

１００カニームごと打たれた杭は、それが縦に七列、横に七列。水脈を探す場所の目印だ。地表に降りてからでは距離を図るのがかなり面倒になりそうだったので、ベルトランは予め目印をつけておくことにしたのだ。

「詠唱のみでその精度……馬鹿じゃないの」

「……褒め言葉として受け取っとくよ」

彼は杖を肩に預けながら苦笑した。

魔力が吸い取られると分かってから、ベルトランは空飛ぶ絨毯に防護魔法と呼ばれるものを掛けていた。当然、地面に置くなんてことはせず、常に滞空させている。

しかし魔法陣を描く都合、どうしてもベルトランは地表に降り立つ必要がある。

「……これ終わったら休憩にするか」

疲れ切った声でベルトランは言う。

水脈探査を始めてから二十三か所目だった。

「だから水脈が枯れてるのよ」

ゴルネサーは絨毯の下に出来た影でぼそりと呟く。それに聞こえないふりをして魔法陣を描く。

「オイェサコージュ！」

浄化の魔法で彼を中心に1カニーム（3メートル）程が浄化された。

その中に魔法陣を描く。毒素と疲れのせいでその動きは緩慢だ。

「オイェアトカラヌラ、水よ」

呪文を唱えると魔法陣は光るが、特にこれといった手ごたえはなかった。今回も空振りだったようだ。

「……一旦休憩だな」

ベルトランはノロノロと絨毯の上によじ登った。ゴルネサーもそれに続く。

まだティアディアラに入って半日ほどしか経っていないが、ベルトランは休憩できる場所の大事さを痛感していた。

彼は解毒の魔法を使えたが、毒素が充満している砂漠ではいくらやっても焼け石に水の状態だ。彼は自分の魔力量が人より多いと自負しているが、それでも限界はあるわけで、いつかは尽きてしまう。

そうなったとき、毒に侵される心配のない場所がなければそのまま命運尽きてしまうだろう。

その点、友人からの餞別の品によって浄化された空気の満ちた部

屋は休息の場としてはうってつけだった。それにルトの壺を加えれば、綺麗な水も手に入る。当初は自身で結界を張って浄化作業をするつもりだったが、そうなると定期的に魔力を使わなければならないので手間になる。友人の心遣いに感謝しきりである。

彼は机に突っ伏して体力と気力の回復を図りながら、そんなことをつらつらと考えていた。柔らかなベッドが欲しいと一瞬思ったが、その考えを振り払う。今そんな心地よいところで寝転んでしまえば夢の世界へ旅立ってしまうこと間違いなしだ。

「無駄だって言ってるのに、よく続くわね」

ゴルネサーが言う。彼女は窓に腰を掛けて紗ごしに外を見ていた。その様子を横目で見たベルトランは、突っ伏したまま答える。

「水脈が完全に枯れているとはまだ決まっていない。今のところ分かってるのは、ここのすぐ傍にある井戸は枯れていて、俺の調べた二十四か所の地下には水がないってだけだ」

「屁理屈よ」

「事実だ」

ベルトランは気だるげに言う。事実、砂漠の中で食らった毒素の影響が彼の思考を鈍らせていた。

「まだ目印をつけた場所すら全部回ってない。俺がいるのは自宅の庭園じゃない。広い広いティアディアラだ。しらみつぶしに探せば、一か所くらい水脈にあたるだろ。ティアディアラには雨が降っている。ってことは、どこかにその水が流れ込んでいるはずだ。水脈がないなんてない。確率の問題だ」

どこか自身に言い聞かせるような響きを感じ、ゴルネサーは押し

黙った。
しばらく沈黙が続いたが、やがてゴルネサーはぽつりと言う。
「魔法使いは卑怯だわ」
独り言のようなそれにベルトランはぼんやりと耳を傾けた。
「人の手では何日もかかることを、一瞬でしてしまう。創造も……破壊も」
ベルトランはゴルネサーから放たれる殺気が徐々に膨れ上がってくることに気付いた。気取られぬように、杖に手を伸ばす。
しかしその殺気はすぐに霧散した。
「どうして信じる神が違うってだけであそこまで非情になれるのかしらね」
どこか虚ろな声でゴルネサーが呟く。
彼女が求めているものは意見でも助言でもないだろうと、ベルトランは黙って彼女の独り言に耳を傾けたのだった。

一進一退

さて、休憩を終えた二人は再び水脈探しへと繰り出したのだが、

「これで四十か所目か……」

ベルトランの声に疲労がにじむ。

気分を入れ替えての探索だったが、相変わらず水脈には一向に当たらない。

ベルトランは口を開くのも億劫だったし、ゴルネサーも特に何を言うわけでもない。沈黙が続いた。

四十一か所目も空振り。その次も駄目だった。

ベルトランはふと、ゴルネサーが泣きそうな顔をしていることに気付いた。目に力を込め口を固く結んで泣くのを堪えている。それでもどこか縋るようにベルトランが魔法陣を描く様を見つめていた。

彼は無言で魔法陣を描き続けた。

四十二か所目、四十三か所目、と外れが続き、そしてとうとう最後につけた目印の場所、四十八か所目となった。

疲労困憊のベルトランだったが、なんとか体に鞭打って魔法陣を描く。

そろそろ残りの魔力も少なくなってきていた。魔力は休めば回復するが、それでも万が一のために余力は残しておきたい。ティアディアラでは何が起こるか分からない。前人未到の極地のようなものだ。

最後の一か所、今までにまして気合いを入れた魔法陣を描く。

もはや何回も書き過ぎたせいで、ベルトランは自分が何を描いているのかすら分からなくなってきた。この魔法陣とはこういう形だ

っただろうかという迷いすら生まれてくる。
それでも手はゆるゆると動き、崩れる前に魔法陣を描き上げた。
「オイェアトカラヌラ、水よ」
祈るような気持ちで呪文を口にしたベルトランだったが、願いもむなしく魔法陣は僅かに光っただけだった。
ここも外れだ。
「やっぱり、もう……」
ゴルネサーが下唇をかみしめた。
「お嬢さん、結論付けるのは早い、が、一旦戻って休憩しよう」
ベルトランが声を掛けるが、返事はなかった。

部屋に戻ったベルトランは再び机の上に突っ伏した。浄化魔法を使っていたとはいえ、毒素の蔓延した空気にさらされたせいで体力が根こそぎ持っていかれている。魔力切れも加わって、動くのがひどく億劫な状態だ。
ゴルネサーは相変わらず窓に腰を掛けて、外に視線を向けている。ベルトランの場所から見える横顔が今にも泣きそうに見えた。
ベルトランはゆっくりと身を起こすと、煙草に火をつけた。
「……魔法使いだって万能じゃないさ」

紫煙を吐き出しながら、ベルトランは言う。

「赤ん坊を立派な大人に育てるなんてことは、魔法じゃまず無理だ。長い年月を掛けて人の手でやらなきゃな」

ゴルネサーの視線がベルトランへと向けられる。ベルトランは宙に漂う煙をぼんやりと見つめていた。

「人の命が散るのは一瞬だが、一人の人間が生まれてくるまでには一年近くかかる。魔法ではどうしようもない」

そして魔法では人を生き返らせることはできない。

ベルトランは苦々しい気持ちで続けた。

「魔法使いにとって破壊は容易だが、生命のあれこれってのは手が出せない領分だ。だから、時間がかかる。植物が芽吹いて花を咲かせるように、卵から雛が孵ってやがて巣立つように」

ゴルネサーの目に怒りの火が点った。ギリギリと拳を握りしめ、ベルトランを力いっぱい睨みつける。

ベルトランはゴルネサーの方を見ることができなかったが、彼女の心の声が聞こえた気がした。

ならどうして、なぜ取り返しのつかないことをしたの、と。

生き物が死に絶え、地表を焼き払われたティアディアラが本当の意味で元通りになることは決してない。緑が戻ったとしても、それはあくまで新しく生まれ変わったティアディアラなのだ。死んだ人は帰って来ないし、失われたものが全て戻ってくるわけではない。

それはかつてゴルネサーが愛したティアディアラではない。彼女が家族と再びあいまみえることはないのだ。

「時間がかかるんだ。俺は絶対に諦めないから」

決意を込めて、ベルトランが言う。

彼はようやくゴルネサーと視線を合わせた。

「だから、お嬢さんもやっぱり無理だとかもう駄目だとか言うな。絶対俺がやり遂げてみせるから。待っててくれ」

まだ比較的新しいだろう彼のローブは砂で汚れてしまっている。疲れきっているのだろう、顔色は悪く、髪もぼさぼさだ。

しかしそれでもベルトランの言葉には、力があった。

「……馬鹿みたい」

涙声で呟いたゴルネサーは、それでも否定の言葉を口にしなかった。

ベルトランのタバコがすっかり短くなったころ、今日はもう休もうかと考えていたベルトランはあることを思い出した。

「一度、昼間に作った装置を見に行くか」

日が傾いてきており、随分と涼しくなってきている。日が沈めば肌を刺すほど寒くなることはもちろんだが、視界も悪くなる。魔法で明かりを点すことは可能だが、魔力を無駄遣いすることは避けたい。

水脈は見つからなくとも、例の装置で上手く水が集められるのならば、早々に植物の生育に取り掛かることも可能だ。

「そうね」

珍しくゴルネサーが返事をした。ベルトランはそっと口元を手で覆った。

さて、再び空飛ぶ絨毯で水分集積装置のところまでやってきた二人は、水瓶の中をのぞき見た。

「あまりないわね」

「そうだな……」

ベルトランは頭をかいた。

十個の瓶を取ってそれぞれ覗いてみたが、どれもスプーンですくえるかすくえないかというくらいの少ない量だ。

「まあ、水分がよく集まるのは気温差の激しい日の出と日の入り前後らしいし、こんなもんだろ」

少なくとも少しは集まるということで、ベルトランはほっと胸をなでおろしたのだが、

「……ねえ、これ壊れてるわよ」

ゴルネサーが固まった屋根を叩きながら言う。

「まさか。結構強度があるんだぞ」
「でも冷たくないわ」

その言葉にベルトランは慌てて装置の屋根の部分に触ってみた。ゴルネサーの言う通り、全く冷たくない。それどころか、太陽からの熱を吸収しているのか熱いくらいだ。

その原因にベルトランはすぐに思い当たった。

「沈黙の灰のせいだ」
「浄化したんじゃないの？」

ベルトランは首を振る。

「風が吹いて、沈黙の灰のコア部分が砂と一緒に飛んできたんだ。そいつがこの屋根に刻んだ魔法陣の魔力を全部吸収したんだろう」
「でも屋根が崩れてないわ」
「この屋根はレンガみたいなもんだ。作る時に火の代わりに魔法の力を使って固めたってだけだから魔力がなくても形が崩れたりしない」

そもそも浄化魔法も沈黙の灰の効果を一時的に抑えるものであって、永続的なものではない。なぜこんな当り前のことに気付かなかったのかとベルトランは肩を落とした。

「それじゃあこれは単なる置き物ってことね」

ゴルネサーがため息をつく。ベルトランは情けない顔で笑った。

「今日はもう魔力の残量が厳しい。明日改めて改良するよ」
「……甲斐性なし」

その罵り文句はちょっと違うんじゃないかと思いつつ、ベルトランは聞こえないふりをして絨毯へと乗り込んだのだった。

「……まあ、砂漠で水を確保するのはもともと難しいしな」

少々言い訳がましく弁解するベルトランに、ゴルネサーは白い目を向けた。

「あら、ティアディアラ以外では簡単に見つかるのかしら？」
「昔は世界中を飛び回ってたからな。サバイバル技術も軍人から教わったもんだ」
「へえ。例えば？」
「そうだな……」

ベルトランは過ぎ去った昔のことを思い出す。他の魔法使いと比べて幼いころから従軍していた彼は、割と軍人たちから可愛がられていた。
二十歳を過ぎてからは城の中で魔術書とにらめっこする日が続いたいたせいで、教わったサバイバル技術は忘却のかなたとなっていた。

「そうだな……」
「……本当に覚えてるの？」

なかなか言わないベルトランにゴルネサーが疑いのまなざしを向ける。
大人の意地を見せようと必死で記憶を掘り返したベルトランは、昔も昔、彼が十代半ばのころの記憶に突き当たった。

「お、覚えてるさ。枯れた川の端っこの方を掘り返、して……」

ベルトランは口を押さえた。

「ちょっと？」

唐突に動きが止まったベルトランをゴルネサーが不審そうに見る。

「お嬢さん、戻る前に寄り道しよう」

「急に何よ」

ゴルネサーが頬を膨らませる。

ベルトランは真剣な顔で言った。

「水脈が見つかるかもしれない」

求めたもの

ベルトランが降り立ったのは、最初に調べた井戸の小屋の前だった。

絨毯から降りた彼は迷いなく井戸の傍まで近づくと杖を振るった。

「エラヌクラク！」

ゴルネサーが追いつくよりも早く井戸の底へ飛び降りたベルトランは、明かりを灯すとはやる気持ちを抑えながら浄化の魔法陣を描く。

「ここはもう調べたでしょ？」

「いや、調べてない。俺がしたのは聖霊に呼びかけただけだ。水脈自体の探査はしてない。……オイェコサージュ」

井戸の中に白い光が満ちる。

ベルトランは探査の魔法陣を描き始めた。

「俺が昔砂漠を行軍した時、教えてもらったんだ。砂漠で枯れた川からも水を得ることができるって」

「どうやって？」

ゴルネサーは首をひねった。

「枯れた川の端の方にある少しへこんだところを掘り返すんだ。腕一本分くらい掘ると、湿った土が出てくるんだ」

魔法陣を描き上げたベルトランは、ほっと息をついた。ごくりと息を飲み、杖を魔法陣に突き立てる。

「オイェアトカラヌラ、水よ」

ベルトランの頭上から砂が降ってきた。ゴルネサーが井戸の縁から身を乗り出したのだ。

魔法陣がうっすらと光を放つ。

ほのかに明滅した魔法陣から、やがて青い光の玉が一つ二つと浮かび上がってきた。

シャボン玉のように飛んでは消える光の玉は、少しずつ数を増やしてベルトランの回りを舞い踊る。青い光が井戸の底を照らした。

その光景に、ベルトランは魂が抜かれたように魅入っていた。ゴルネサーもまた、眼下に広がる幻想的な光景に目を奪われていた。

「……だ」

「え？」

ベルトランの小さな呟きを、ゴルネサーが聞き返した。

ベルトランは興奮を隠しきれずに言う。

「成功だ！　やっぱり、この井戸の底に水脈があるんだ！」

言下に杖を浮かすと、彼は呪文を唱えた。

「空気よ、エラゴティリアムタ、エモキテューキセガー！」

目に見えぬ空気が彼の杖の先に集まり、圧縮されてゆく。

ベルトランは井戸の中心に、激しく杖を突き立てた。

途端に激しい衝撃が地面を揺らす。ベルトランの杖の先に集まった空気の杭は地面に大きな穴をあけ、そのまま地中深くへと突き刺さった。

そして、地面を叩くような音がしたかと思うと、その穴の中から水が噴き出してきた。

「見ろ、お嬢さん！」

ベルトランが興奮した声音でゴルネサーを見上げた。彼が動いたことで、ばしゃりと水音が響いた。

「……信じられない」

ゴルネサーは口元を押さえながら、目を潤ませた。彼女がティアディアラの地で湧水を目にするのは、実に二十年ぶりだった。

「やっぱり水はあったんだ！　水があれば、明日からでも植物を育てることができる！」

ベルトランはあふれ出てくる水を手で掬い上げながら声を震わせた。

彼とて水が必ず見つかると確信していたわけではない。ゴルネサーには自信たっぷりに言い切ったものの、最悪の可能性も考えていた。

初めてのことだ。今まで誰も成功したことのない仕事に、不安を抱かないわけがなかった。

しかし水脈が見つかったことで、彼の目標に大幅に近付いた。

ベルトランはその喜びに体を震わせたのだった。

ゴルネサーもまた、奇跡のような光景に胸を打ち震わせていた。が、井戸の底の明かりが消えたことに気付き、井戸の底に向かって声を掛けた。

「ねえ、ちょっと」

しかし返事はない。

「ちょっと、返事しなさいよ！」

再度ゴルネサーが声を掛けるが、ベルトランの返事はない。

「……まさか」

ゴルネサーの胸に、不吉な予感がよぎった。

肌寒さにベルトランは目を覚ました。身を起すと、彼に掛けられていた毛布がずり落ちる。すっかり辺りが薄暗くなっているために判別がつきづらいが、どうやら彼の拠点で寝ていたようである。部

屋の隅に置いてあった木製のベッドの上に寝かされていたようだ。
状況が飲み込めないベルトランが自身の記憶を辿っていると、彼の傍らで動く気配があった。
思わず杖に手を伸ばそうとしたベルトランだったが、その手は空を切った。いつもの場所に杖がなかったのだ。
「……ねえ、命の恩人であるわたしに対して攻撃でもするつもり？」
ゴルネサーが目をこすりながら言う。
「すまない……だが、俺は一体？」
ベルトランが戸惑っていると、ゴルネサーがやれやれとため息をついた。
「毒素に汚染された水に浸かってたせいで倒れたのよ。馬鹿じゃないの？」
「……そうか。悪かった」
いい年をしてはしゃいでしまった自分が恥ずかしく、ベルトランは左手で顔を覆った。
「しかし、お嬢さんが助けてくれたのか？」
「そうよ。もっと感謝しなさいよね」
「ありがとう。しかし……」
ベルトランは不思議そうな顔で尋ねた。
「お嬢さんがどうやって俺を井戸の底から引き揚げてくれたんだ？」

ベルトランは太ってはいないが、成人男性としては平均よりやや大柄な体型である。井戸の底から引き揚げるのには大の大人でも苦労しそうなものだ。
ゴルネサーは有無を言わせぬ笑顔でにこりと笑う。

「乙女の秘密よ」
「……そうか」
「そうよ。多少体にあざやこぶができていようと、ひもの跡がついていようとわたしに感謝するのが筋ってもんでしょう」
「……そうだな」

ベルトランは体調が悪いこともあり、早々に追及を諦めることにした。ゆっくりと寝台に横たわる

「明日ははしゃぎすぎないでね」

そう言ったゴルネサーはくすくすと笑うと、夜の闇に溶けるように部屋を出て行った。
それを見送ったベルトランは、ふと新たな疑問に首をひねった。

ゴルネサーはどこで寝ているのだろうか、と。

準備万端整えて

翌朝、ベルトランは日の出よりも早く目を覚ました。昨日の夜は気付かなかったが、彼は何も衣服を身につけていなかった。全身井戸水で濡れていたから脱がしたのだろうとベルトランは冷静に判断した。怪我がないか調べて見たが、多少打ち身が見られる程度だった。

若い娘には随分なものを見せてしまったと若干自己嫌悪に陥りながらも彼は替えの服を着込む。昨日の服を探してみると、畳んだ状態で部屋の外に置いてあった。毒素がしみこんでいるからだろう。ベルトランは服の処理は後回しにすることにした。

部屋に戻って煙草を吸いながら毒避けの紗を少し持ち上げると、窓の外の景色を眺めた。

地平線近くの空はすでに橙と紫に染まっており、砂が空の色を僅かに映していた。頬を撫でる風にはまだ夜の余韻を持つ冷たさがあった。

ベルトランは窓の外の荘厳な景色に目を奪われながらも、その感動を分かち合う人がいないことを残念に思った。人どころか、この大地には未だ動物すら存在しない。

ベルトランは紗を下ろすと、荷物の中から携帯食糧を取り出した。携帯食糧は三十食分持ってきた。あまり量が多いと絨毯に乗らないため、これが限界だった。残りは栄養を補給するメディカメントゥムと呼ばれる丸薬で補う予定である。

テーブルの上に一食分の食料を置くと、ベルトランはそれに張られた幾重もの結界を杖で叩いて解いていく。

四角い結界に包まれた食料は、ぱっと見た限りでは真っ黒な四角い箱である。

「危険物？」

階段のところから顔を出したゴルネサーが胡乱げな声で言う。

ベルトランは一旦手を止めると、彼女の方へと振り返った。

「おはよう、お嬢さん。これは朝食だ。食うか？」

「結構よ」

相変わらず連れない態度にベルトランは苦笑した。

「食べ物にどうして結界を？」

昨日と変わらぬ黒のアバヤ姿で現れたゴルネサーは、少々慎重な足取りでテーブルへと近づいてきた。別段ベルトランを意識している様子はない。

そのことに安堵しつつも、彼女の言葉にベルトランは目を瞬かせた。

「ティアディアラでは保存用の結界は使わないのか？」

「保存用？　結界を？」

ゴルネサーは訝しげな顔をする。ミルージュではよく使われていた魔法だが、ティアディアラでは馴染みがないようだ。

といっても、別段不思議なことではない。

ベルトランのいたミルージュとティアディアラは距離もそれなりに離れているし、間に大きな山脈が間に横たわっているために気候も違う。そのため文化も違えば宗教も違い、魔法に対する考え方も違うのだ。ことミルージュは魔法を積極的に推奨していたし、門外不出の魔法技術をいくつも抱え込んでいた。他国より魔法の利用頻度も高く、用途も多岐にわたるのだ。

ベルトランは喋るべきかどうか迷ったが、この場所で何を喋ろうとも言いふらす相手もいないのだから、別に構わないだろうと判断した。元々学者肌の彼は専門分野については喋りたがりである。

「結界にも何種類かある。例えば外から来たものを跳ね返す、一方通行にする、生き物だけを通さない、無機物だけを通さない、空気だけを通す、他にも色々ある。その中でもズィーゲル結界と呼ばれる外界と結界内を完全に隔離する結界には特殊な効果がある」

そう言ってベルトランは杖で結界をまた一つ解除した。

「結界の中に流れる時間を緩める効果だ」

「時間を、緩める？」

「そう」

ベルトランは一つ頷くと、もうひとつ結界を解いた。この保存用の結界は何重にも結界を施しているため、解除までに時間がかかるのが難点だった。

「ズィーゲル結界は生き物には干渉できないんだが、対象が無機物なら何重にも重ねるとその変容を大幅に遅らせることが分かっている。これはカポイの砂時計実験で実証されたものだ。まだ完全に解明できてはいないが、ズィーゲル結界が光や空気、熱を遮断することによって、外界の時間の流れという干渉をも遮断してしまうんじゃないかという説が濃厚だな。そもそも物質の変容が時間の流れに影響されているというのが五年前にアンマーバッハという魔法使いが発表した論文によると――」

「理論は結構よ。分かりやすく結論だけ言ってちょうだい」

話が長くなりそうだと察したゴルネサーがうんざりとした調子で言う。ベルトランは申し訳なさそうに肩をすくめて煙草を揉み消した。

「つまり、十重二十重にズィーゲル結界を重ねると、結界の外では何日も経過していても、内部ではほんの数秒の時間しか流れていないという現象が起こるんだ。だから結界の解除ができる魔法使いたちは食糧にズィーゲル結界を施して携帯食糧代わりにするんだ。するとその特質上から――」

言いながらベルトランは最後の結界を解いた。

黒い正方形は霧散し、中からは新鮮なサラダとミルク、まだ湯気の立つ鳥肉のクリーム煮、そして柔らかなパンが出てきた。

「いつでもできたての料理が食べられる。食器も魔法で作ったものだから処分も簡単だ」

「魔法使いって……」

ゴルネサーは心底呆れた顔でベルトランを見た。

「本当に食べないのか、お嬢さん」

「いらないわ。必要ないもの。さっさと食べたら？」

ゴルネサーはそう言って昨日のように窓枠に腰を掛けて外を眺め始めた。ベルトランはしばらくその横顔を見ていたが、やがて肩をすくめて食事を開始した。

「綺麗な朝焼けだな」

パンをちぎりながらベルトランがゴルネサーに声を掛ける。

「ええ。そうかもね」

ゴルネサーは素っ気なく答えた。

「……前の方が綺麗だったわ」

風の音にかき消されそうなほど小さな声を拾ってしまったベルトランは、なんとも気まずい思いで食事を続けたのだった。

さて、十数分後に食事を終えたベルトランは、荷物の中からいくつかの書類を取り出してテーブルの上に広げた。ゴルネサーは近寄ると、それを覗き込む。

「これは何の絵？」

「マジックプラントでの土の浄化の手順を図説してくれたもの、だ」

魔術書以外の本を読むのが滅法苦手なベルトランのために、植物学者の友人アンネリーゼがフェルディナントと協力して描いてくれたのだ。

まず最初に苗床にマジカルプラントの種を植えて育てるまでの手順。日照時間や水の量などが分かりやすく書かれている。次に地面に植える際の注意点、全滅防止のための予防策など。マジカルプラント以外にも沈黙の灰で汚染されていても育つインウィクトゥスという木の実の発芽方法もあった。

ゴルネサーは成長後のマジカルプラントとインウィクトゥスの絵

を見て眉をしかめた。

「こんなおどろおどろしい植物でティアディアラを埋め尽くすの？
冗談でしょう？」
「残念ながら。有用なものが美しいとは限らないって典型だな」

ベルトランは苦笑した。
絵に描かれているマジカルプラントは葉の細い植物で、ストローを伸ばして繁殖するタイプだった。細い葉はグネグネとうねっている。その傍に描かれたインウィクトゥスは、あちこちに折れ曲りこぶのついた太い枝を伸ばし、そこから葉のついた細い枝をだらりと垂らしている木だ。このインウィクトゥスという植物はどんな過酷な環境でも生える植物と言われている。
この二つが並ぶと、なんとも陰鬱で不気味な印象になるのだ。アンネリーゼが写実的に書いているのもそれに拍車をかけていた。

「ま、マジカルプラントは沈黙の灰のコアがなくなったら自然に枯れるそうだから、心配することはないだろう」
「それ、沈黙の灰の時もそう考えてたんじゃないの？」

疑わしげにゴルネサーは言う。ベルトランを睨みつける目つきは鋭い。
それに対して彼は勤めて明るく答えた。

「対沈黙の灰用に開発された植物だし、慎重に実験も重ねて実証済みだ」
「この不気味な木は？」
「他の木を育てるのと入れ替えに薪にすればいい」
「……まあ、そうね」

ゴルネサーはいまいち納得していない表情だった。
「別にマジカルプラントがあるなら、この木を育てる必要はないでしょう？」
インウィクトゥスの絵を指ではじきながらゴルネサーが言う。しかしベルトランは首を振った。
「いや。必要らしい。こっちを見たら分かりやすいだろう」
彼が示したのは他のよりもさらに簡易にデフォルメされた図だ。マジカルプラントとインウィクトゥスが地中から養分を吸い上げている様子が書かれている。
「マジカルプラントは草だ。だからそれほど地中深くまで根を張らない。しかし傍にインウィクトゥスを植えることで、地中深くから沈黙の灰のコアを吸い上げることができる。それにしっかり土を掴むから山造りにも役立つ」
「山造り？」
「ああ。元の植生に戻すために必要だからな。砂漠だと風が吹いたら地形が変わってしまうだろう？」
「……つくづく遠大な計画ね」
「なんとかするさ」
飄々と言ってのけるベルトランを半目で見たゴルネサーだったが、やがて一つため息をついて呟いた。
「今度倒れたら助けないわよ」
「ああ、気をつける」
「嘘臭いわ」

「本当さ」
「どうだか」

ゴルネサーの手厳しい反応にベルトランは肩を落とした。
それで一応気が済んだのか、ゴルネサーは他の絵も調べ始めた。

「この絵は何？」
「ん？　ああ、これは空中菜園だ」

ゴルネサーが持つ絵には、互いに屋上に渡した橋でつながれた円筒の図が描かれていた。
円筒形の中は少しだけくぼんでおり、その中に植物が植えられている。

「今後長期的にティアディアラで生活する場合、自給自足は不可欠だ。ただ食べる植物を育てる場合は浄化した土で育てなきゃいけないだろう？　しかし地面に植えたんじゃ風が吹いたら毒素が飛んでくるし、かといって屋内に植えたら量が賄えない。だから毒素をまとった砂が飛んでこないように高所に畑を作ってそこに浄化した土を入れて育てたらいいっていう計画らしい」

しかしその第一条件としてマジカルプラントを早々に発芽させ、土を浄化しなければならない。

「植物が育つのだって時間がかかるでしょう？　その前に食料が尽きたらどうするの？」
「一応結界の境界まで行けば受け取れるはずだが……」

ベルトランの歯切れは悪い。ゴルネサーは不審そうに眉を寄せたが、深くは追求しなかった。

「それで？　今日は何をするわけ」

テーブルの上に書類を放り出したゴルネサーが言う。

ベルトランは荷物の中を探ると、こぶし大の深い青色をした水晶を取り出した。

「これだ」

「それは？」

「星水晶だ。昨日でよくわかった。浄化魔法をいちいち魔法陣から描いてたら大変だ」

「今更？」

ゴルネサーの言葉がベルトランの胸に刺さる。

常の彼ならば、浄化魔法を連続して使おうが疲れたりはしない。が、ここはティアディアラ。沈黙の灰の毒素が満ちた死の大地だ。彼の常識は通用しなかった。

「で、この水晶っていうのは何なの？」

若干気落ちした様子のベルトランのことは意に介さず、ゴルネサーが興味深そうに星水晶を見つめる。やはり年頃の少女のためか、宝石には興味があるらしい。黒い瞳を輝かせている。

「ああ。これは星水晶といって、魔法の自動反復装置に使えるんだ。ほら、中に星みたいなきらめきがいくつも浮かんでるだろう？　ここに魔法陣を渡すと魔力が摩耗することなく魔法陣を維持することができる」

「空飛ぶ絨毯や浄化紗だってそうでしょう？」

そう言ってゴルネサーが巻かれた状態で壁に立てかけられている絨毯を見やる。
しかしベルトランは首を振った。一から説明しようとして思いとどまる。話しはじめたらまた長くなってしまうからだ。

「似てるが違う。使える魔法は限られるが、星水晶の内部で魔力が自然と発生する仕組みだから何度でも使うことができる。酷使しなければそれこそ何十年先でも」

本当ならもっと重要な魔法で使おうと思ったのだが、プランを変更せざるを得なかった。毎回魔法陣を描いていたのでは作業が遅々として進まないし、下手すればまたぞろ倒れてしまう。
ベルトランは魔法陣用の紙を取り出すと、浄化魔法の魔法陣を描きだした。ペンでの場合杖で描くよりも緻密に描けるので、魔法陣の大きさは小さくて済む。

「昨日のことで、井戸水も浄化が必要だと分かったからな。今後もどんどん使うようになるだろ」
「身をもって証明したわけね」

ゴルネサーが嫌味っぽく言う。ベルトランは肩を落とした。

魔法陣を描き終えたベルトランは、その上に星水晶を置き、杖を構えた。一度深呼吸をして集中すると、呪文を唱える。

「エモキマジキニモノス、『オイェコサージュ』」

深い青色をした星水晶の内部が柔らかく発光する。魔法陣が浮かび上がり、星水晶の内部へと吸い込まれるように消えていった。発光が収まると、水晶内部の煌めきの間に、インクルージョンのよう

に小さな魔法陣が浮いているのが見えた。

「成功だな」

ベルトランは満足げに笑う。ゴルネサーは黙って、しかし興味深そうにそれを見ていた。

星水晶を持ったベルトランは高らかに宣言した。今日から植物を育てるぞ、と。

ティアディアラの再生が本格的に始まろうとしていた。

外枠作り

さて、ベルトランは外へ出ると、拠点から南東に１００カニーム（300メートル）ほど離れたところにある砂丘の近くへと足を運んだ。

星水晶で辺りを浄化すると、大きめの魔法陣を描く。そして呪文を唱えると、その場所に直径３０カニーム（90メートル）、深さ半カニーム（1.5メートル）ほどの穴が開いた。穴の内部は焼き固められたようになっている。底にはいくつかの小さな穴が開いていた。

「これは？」

「空中菜園の土台、だな。植木鉢みたいなもんだ」

ベルトランは懐から出した設計図を示しながら言う。彼は植木鉢と称した土台部分の近くに大きめの魔法陣を描いた。

「ナスカトエサディム、曲がった煉瓦、イニローディジェーミ！」

魔法陣が発光すると、地中から緩やかに湾曲した煉瓦が浮かび上がってきた。

煉瓦と言っても、道に敷くような小さなものではなく、長さは約２カニーム（6メートル）、高さと幅が１カニーム（3メートル）はある巨大なものだった。

それが一つ出来て魔法陣から浮かび上がると、緩やかに動いて穴の底へと降りていく。かと思えば、魔法陣からは先ほどと同じものが再び生じていた。そちらの煉瓦も同じように穴の縁に沿うように底へと移動していった。

煉瓦は連なるように隙間なく並び、穴の底で緩やかな円を作った。それを確認したベルトランは杖を振るってモルタルを作り上げると、煉瓦の隙間へと一瞬で塗りこんだ。そしてその上に二段目の煉瓦が下りてゆく。

「ほんっと、魔法使いって便利ね」
「大工の息子と縁が深くてね」
ベルトランは涼しい顔で嘯いた。
そうしてあっという間に煉瓦の塔は４カニーム（12メートル）ほどの高さになった。
下から見上げると、かなりの迫力がある。
「あとは乾いてから土を入れたら空中菜園試験場第一号の完成だな」
「試験場？」
聞き慣れない言葉に、ゴルネサーが首を傾げた。
ベルトランは解説する。
「植物なんかを育てる時には、すでに育て方が確立されてたら大丈夫なんだが、失敗する可能性もあるだろう？　だから条件を変えて何か所かで試しに育ててみることにするんだ。植木鉢、地面、温室、色々とな」
彼の言葉にゴルネサーが不思議そうな顔をした。
「でも、さっきの紙に説明が描いてあったじゃない」
「そうだな。もちろんあれを基本にするさ。でもここは実験室でもミルージュでもない。全滅の危険を避けるためにも、保険は必要だろう。まだ分かってないことも多い」
無知は罪だ。そして無知は恐怖であり、容易に死の引き金となりうる。

ベルトランの真剣な言葉に、ゴルネサーはふうんと小さく呟いただけだった。

「それで、土はどうするの？　砂丘はなくなってしまったようだけど」

ゴルネサーが周囲を見渡して言う。

ベルトランが煉瓦を作るために砂を固めたため、砂丘だったところはすっかに平らになっていた。

「本当なら何種類か試したいんだが、あまり離れると他の魔法使いと領域がかぶるからな。とりあえずは砂を魔法でもってきて入れるつもりだ」

「……食べ物作るんじゃないの？」

「ここはマジックプラントを植える。食べ物は別の場所につくる」

「植物は一朝一夕で育たないわよ」

「分かってる。ま、節約していくさ」

ベルトランは肩をすくめた。

さて、モルタルが固まるまでの間、ベルトランは空飛ぶ絨毯であちこちを回り、手頃なサイズの岩を見つくろっていた。巨大な植木鉢の底に入れるためである。

岩の多くは砂に埋もれて見えなくなっていたが、砂丘が移動したために現れた岩もあったため、必要量のはすぐに見つかった。

それらを魔法で運ぶと植木鉢の底に下ろした。側面がしっかりと固まるまで時間がかかるため、半日は砂を入れるのを待たなければならない。

その間ベルトランは拠点へ戻ると、部屋の中で魔法陣を描き始めた。
ゴルネサーが無言で見守る中、魔法陣からはひと抱えある苗床が出てきた。ふかふかとした土も入っている。
ベルトランはそれを浄化紗越しに日の差してくる窓際に置いた。今朝ゴルネサーが座っていた場所である。

彼は苗床に用意していた植物の種を植えて土をかぶせると、ルトの壺から湧いた水を魔法を使って丁寧に撒いた。
さらにもう一つ同じものを作ると、マジカルプラントの種を同様に植えて水を与える。

「……土を作れるんなら、最初っからそうしなさいよ」

ゴルネサーが言う。しかしベルトランは肩をすくめた。

「外で作ったところで風の中に交じる毒素に汚染されるだけだ。まあ、外の砂だけじゃ発芽も無理そうなら何らかの対策はするつもりだが、ティアディアラの全土を覆い尽くすほどの量は難しいからな」

飄々と言ってのけるベルトランを、ゴルネサーは疑わしげな眼で見つめた。

「もしかして、あんたって水もつくりだせたりするの？」
「できないことはないが」
「だったら――」

ゴルネサーが非難の言葉を口にするよりも早く、ベルトランは理由を告げる。

「井戸はともかく、魔法は俺が死んだら使えなくなるだろ」

ゴルネサーは口をつぐんだ。

「俺じゃなきゃ出来ない仕組みなんて糞食らえだ。俺が死んだら全部が立ち行かなくなるなんて、そんなもんは再生でもなんでもない。手間の大小は別として、誰でも持続できる方法じゃなきゃ意味がない」

俺ぐらいの魔力持ちなんて滅多にいないしな、とベルトランは呟く。

「お嬢さんは魔法は得意か？」

休憩することにしたのか、ベルトランが煙草に火をつけながら尋ねる。ゴルネサーは無言で否定した。ベルトランは頷く。

「それが問題なんだよ。魔力を持ってる人間は少なからずいるが、魔法を使える人間は少ない。そもそも魔法をまともに使おうと思ったら何年も勉強して練習しなけりゃならん。で、理論を会得したところで、魔力の量は個人差が大きいから限界なんてすぐに見える。よしんば俺みたいな実力のある魔法使いがいたとしても、今後わざわざここに来て尽力するって保証もない」

実際、彼に近い年代でまあまあの実力がある魔法使いなどはティアディアラへは絶対に行かないと宣言していた。ミルージュにいれば重宝されるし待遇も良いのだから当然だ。

「俺が生きてる間には一般人でもある程度入れるようにするつもり

だが……まあ、そういうことだ」

人間の寿命は長くて百年。日々毒に中てられたらもっと短くなるだろう。ティアディアラを完全に再生させるまでベルトランが生きているという保証はない。

とすると、今後は魔法使いの流刑地になるだろうこのティアディアラは、魔法使いたちの行動が功を奏して毒素が薄まれば貧民層の人間も開拓者として放り込まれるだろう。一度上がそう決定してしまえば、発言力が弱く貧しい彼らに選択の余地があるとは思えない。

魔法は知識が物を言う。体系的な教育を受けられない層では、まともに使える人間は皆無と見ていい。

ならば、そんな彼らでも運営できる仕組みを作るのがベルトランの使命でもある。

「あなたは猪突猛進の考えなしだとばっかり思ってたわ」

ゴルネサーが珍しく感心したように言った。ベルトランは少しだけ眉を上げると紫煙を吐き出すのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0356v/

死の大地で

2011年9月19日07時46分発行